

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第8章



～修道院の敷地には異様な状況が迫り、

影は、それを落とす物体にしては高すぎたり、幅が広すぎたり、ねじれて見えたりした。物体自体も実際よりずっと遠くにあるように見え、兵士の松明の炎は、あまりにもゆっくりと、あるいは逆方向に揺らめいているように見えた。他の動きも同様に不自然に見え、この新たな状況は、水面下でくぐもった叫び声のように聞こえる男たちの叫び声や、会話の中で同じことを繰り返す男たちの耳鳴りのように、些細なことにも現れた。怯えた馬たちは、まるで震える大地を感じ取ったかのように地面を掻きむしった。そして、独特の匂いがあった。それは、イワヒバリほど刺激的ではなく、むしろ、毒キノコのような、不快な匂いだった。この新しい空気を深く吸い込むと、めまいのように感覚が混乱し、その匂いは、どんな記憶にも残っていないにもかかわらず、嵐の到来を予感させる匂いのようにはっきりと感じられた。確かに、修道院には不自然な状態が漂っており、それは、その状態を引き起こした新しく開かれたゲートストーンと同じくらい恐ろしいものだった。

中庭の奥から叫び声が響き渡り、一人の兵士が寮に向かって走り、窓の下を横切った。上階の窓から油灯が浮かび上がった。

2階の窓から男を殴り倒した。すぐさま別の警備員が駆けつけ、倒れた男を立てて建物から遠ざけた。犯人である2人の従士の少年は、2階の窓から身を乗り出し、急に逃げ去った方向を指差した。

兵士たちは一斉に松明を掲げ、司祭たちの逃走を阻止するため、宿舎の入り口を取り囲んだ。白い髭を生やした長老修道士が、ローブを着た囚人たちをかき分けて進み、拳を振り上げ、背の高い衛兵隊長に説教した。「もしあなたがたが主のしもべであるならば、武器を捨てて我々を通らせなさい！」

軍曹は叫び返した。「部屋に戻れ、修道士！」

僧侶は譲らず、なおも激しく言い続けた。「お前たちの隊長の命令ではなく、神とそのしもべたちの働きを考えよ！お前たちが歪めてしまったものを正せるのは、我々だけだ。この聖なる地では足元に気をつけ、道を譲れ。そうすれば、我々がお前たちの過ちを正してやろう！」

軍曹は聖職者たちの抗議の声にかき消されそうになりながら叫んだ。「部屋に戻れ！さもなければ血が流れるぞ！」しかし、兵士と聖職者の間のいざこざは続き、修道士たちは戸口から溢れ出し、さらに堅固な隊列の中に押し入った。

「あの司祭を捕まえろ！」兵士が叫び、ローブとフードをまとった人影を寮の隅に指差した。人影はくるりと向きを変え、逃げ出した。二人の衛兵が茂みに飛び込み、追いかけた。激しい格闘のうめき声と呻き声に合わせて、葉が揺れ、枝が折れた。

ニコラス修道士は修道服をかき分け、衛兵の顔に唸り声をあげた。「我々修道士を無能だと思ってはならない。」そして衛兵のベストを掴み、引き寄せた。

「私たちと私たちの修道院から出て行け！」

動じない兵士は眉をひそめた。「あなたはとても自信満々のようですね。非武装なのに司祭が軍隊に立ち向かう？」

ニコラスは彼を睨みつけながら、「たとえ敵の大軍が我々を包囲しても、我々の心は恐れない。たとえ戦争が勃発しても、我々はこの点において自信を持つだろう」と説いた。

「自信満々か？それとも愚か者か？」衛兵は彼に問いかけた。「お前の言うことは正しいように思えるかもしれないが、良識ある忠告に耳を傾けた方がいいぞ。」兵士はニコラスに身を乗り出し、修道士は顔をしかめた。「無理強いはいしないでください、神父様。」ニコラスは再び顔をしかめ、男が腹に押し当てたナイフの先を見下ろした。「中に入って、また明日も祈りを捧げられるように生き延びろ！」

「兵士よ、お前もいずれは祈りを乞うことになるだろう」とニコラスは忠告し、ローブの壁の後ろに身を隠した。

「武器を構えろ！」と曹長が怒鳴った。剣や長いナイフを振り回す松明の光が閃いた。「隊列を組め！」兵士たちは一斉に寮へと集結した。入り口を塞ぎ、修道士たちを建物の中に押し戻した。彼らは扉をバリケードで封鎖し、その後、軍曹は彼らの前に警備兵を一行に並べさせた。そして、残りの兵士たちを建物の周囲全体に配置して、松明を持った歩哨の壁を作り、多くの窓を守らせた。

修道院の敷地を横切り、カタコンベの入り口がある建物の前には、20人近い兵士が松明を手に中庭に集まっていた。地下墓地のトンネルでラザロを見つける望みはとうに諦めていた彼らは、搜索を断念し、大聖堂の上層部を調査するために集まった。光り輝く幻影が鐘楼に群がり、幾列にも並ぶグロテスクな彫像の間を飛び回っていた。若い男たちのほとんどは、ボーン大尉率いる国王陛下の近衛兵隊に新しく加わった者たちだった。その中に、銀髪の年配の兵士が立っていたが、他の者たちとは異なり、指揮官の注意は別のところにあった。若い衛兵が松明を掲げている間、年配の男は丸まったもろい紙の束を調べていた。そしてついに、衛兵の方を向き、彼に尋ねた。「これらの羊皮紙は、悪魔の少年のベッドの中にあつたのか？」

「ええ、藁の中に隠れているのを見つけました」と警備員は答えた。「あなたが読書家だとは知りませんでした。」

「できるよ」と老将校は言った。「ある程度はね」

「では、そこには何と書いてあるのですか？」

警官は書類の位置を直し、顔から少し離しながら、懐中電灯の光の下で目を細めた。「最初のページは、投獄されていた聖職者で、一種の翻訳者だった人物が書いた手紙のようです。」彼は羊皮紙の下部に視線を落とした。「署名から判断すると、彼はナラムシンと名乗っていました。」

「他のページには何が書いてあるんですか？」と若い男は尋ねた。

警官は首を横に振った。「文字が読めません。他のページには外国語のような文字が書かれていますが、その後読んだものは何もありませんでした。」彼は残りのページをめくりながら言った。「記号はどれも同じように見えますが、どこか違っています。もしかしたら、単語ですらないのかもしれない。」

若い衛兵は老人の耳元に顔を近づけ、ささやいた。「あなたが文字を読めない理由は分かっています。それは悪魔の舌ですから！」

警官は身を引いて目を細めた。そして慌ててページをめくり、彼を叱責した。「字も読めないくせに、悪魔の印を知っているとでも言うのか？」

若い兵士は、大聖堂の屋根を指さして弁明した。「どうして

悪魔少年とその悪魔の言葉による秘密の呪文以外に、あの空飛ぶ精霊たちを説明する根拠はあるのか？

近くにいた警備員は警官に対し、彼の主張を擁護した。「彼の言うことは本当です！奴らは地獄の底から来た靈魂に違いありません！」

すっかり苛立った警官は振り返って彼に尋ねた。「息子よ、幽霊を見たことがあるか？」

「いいえ」と男は認めた。

警官は男の腕を掴んだ。「地獄に行ったことがあるか、坊や？」

男は「いや、違う。でも、誰もが知っていることだが…」と答えた。

「では、どうしてあなたはそこに立って、地獄の霊が見えるなどと言えるのですか？」老兵は腕を離し、両手を腰に当ててから上を見上げた。「私自身は、霊や悪魔、地獄の炎などというものを見たことはありません。しかし、だからといって、これらの人々の間で恐怖や嘘を広めるようなことはしません。正直なところ、ここで私たちが目撃しているものが何なのか、誰も知らないのです。」

扉が勢いよく開き、兵士たちが振り返ると、窒息しそうな二人の警備兵がよろめきながら歩いているのが見えた。兵士たちが兵士たちの方へ向かうと、衛兵たちは四つん這いになって息を切らしながら倒れ込んだ。兵士たちは衛兵たちを取り囲み、衛兵たちが地面に落とした燃える松明を拾い上げた。ほとんど咳き込みながら、衛兵の一人が地下墓地の奥深くで激しい火事が起きていることを兵士たちに告げた。彼は息を整え、見上げながら「煙で何も見えない」と付け加えた。松明の光の下で、兵士たちは煤で覆われた頬を伝う黒い涙と白い筋を見た。

再び若い男は警官に話しかけ、ドアの方を指差した。「悪魔の魔術でなければ、石のトンネルが炎上するなんて、どう説明できるというのですか？」

「悪魔の少年の？」

兵士たちは火元を探して将校のそばを駆け抜けていった。若い男が後を追おうと振り返った時、将校は彼の腕をつかみ、危うく彼を地面から引きずり倒しそうになった。そして、彼から松明を取り上げ、「お前たちが炎を追いかけている間、私は暗闇の中に立っているわけにはいかないぞ、坊主」と言った。

「火事を探したくないのですか？」

冷静沈着な警官はくすくす笑った。「もしかしたら、彼らが盲目で息苦しそうに戻ってくる時間を与えてもいいかもしれませんね。もし彼らのうちの一人が火を見つけるのに十分な時間息を止められたとしても、その時何をするかなど考えもしないでしょう。煙から逃げる前に、炎に用を足すことさえないでしょう。」彼は首を振り、ドアの方を指差した。

「しかし、もしそれがあなたにとって苦痛であるならば、彼らに加わっても構いません。」

若い男は戸口を駆け抜けた。警官はまだそこに居る二人の男の方を向いた。

地面で窒息しそうになっている。「じゃあ、君も他の人たちについて行きたくないのか？」

そのうちの一人がよろめきながら立ち上がり、「我々はここに残る」と答えた。

「痛みが道しるべとなると、人は急いで学ぶものだ」と、兵士は面白そうに言い放ち、深呼吸をした。「ならば、私と一緒に来い。水とたくさんの桶を探しているのだ。」三人は修道院の井戸を探し求め、食堂へと足早に歩き出した。

警備隊長は宿舎を出て、厳粛な足取りで浴場に向かって行進した。建物の正面に近づき、数人の兵士に近づくと、彼は「自白は得られたか？」と叫んだ。警備隊長が彼らの間に立つと、松明が分かれて、背が低く汚れた、片腕の兵士が現れた。右腕は欠損していた。彼の足元には、

すすり泣きながら、タテウスは浴場の壁にもたれかかり、地面に座り込んだ。男は振り返り、彼は指についた血と髪の毛をズボンの裾で拭き取りながら、かすれた声で軍曹に答えた。「彼らはまだ悪魔の少年の居場所を明かしていません。しかし、彼らはもう限界に近いのです、軍曹。」

軍曹はブーツの近くの地面に、破れて泥だらけの顔覆いが落ちているのに気づいた。それから辺りを見回し、他の兵士たちから離れて立っている衛兵を見つけた。その衛兵の顔はやつれ、苦悩の表情を浮かべていた。衛兵の足元には、もう一人の奇形の聖職者の少年が、傷つき、ほとんど裸の状態で横たわっていた。ミゲルの絶え間ない息の霧がなければ、その少年は小さな死体。「明かりをくれ」と軍曹は命じ、一番近くにいた兵士から松明を受け取った。彼はタテウスの前にしゃがみ込み、そのグロテスクな姿を調べた後、「ラザロの従者がどこに隠れているか教えてくれれば、宿舎に戻してやろう」と言った。

タテウスはただ泣くばかりだった。頭が重すぎてまっすぐに支えられないかのように、彼の頭はぐらついた。

「わかった」と兵士は立ち上がり、振り返って言った。そして片腕の男にこう告げた。「彼の見た目に惑わされてはいけません。彼はまだ子供だ。子供は傷つきやすいものだ。」

兵士たちはため息をつき、その場で身じろぎをしながら、苦痛に満ちた、長く引き延ばされた時間の経過を伴う気まずい瞬間を思い返していた。彼は片腕を失った兵士に尋ねた。「隊長はまだ教会にいますか？」

「彼を見ていません」と男は答えた。軍曹は唾を吐きながら警備兵の間をすり抜け、「バランスを取れ！自白を期待しているんだ、死んだ少年たちじゃない。そして、手を出すな僧侶。」

あたりを見回しながら、片腕の兵士は「どの僧侶ですか？」と尋ねた。

「彼は向かっています」と軍曹は答え、意識を失って無防備なミゲルのそばに立ち止まった。彼は警備員にミゲルを覆うように命じ、男は突然自分のベストを脱ぎ、少年を包むと、軍曹はうなずいて暗闇の中に消えていった。中庭。

修道院の北の角では、武装した兵士たちが彫像のように並んで大聖堂の脇の入り口を守っていた。チーン !小さな石が兵士の一人のヘルメットに当たって跳ね返った。

警備兵たちと彼も暗闇を覗き込んだ。ドスン !大きな岩が別の兵士のヘルメットに当たり、ヘルメットが傾いた。彼は飛び出し、剣の柄をつかみ、そして、犯人を探して影の中を搜索した。

「石を投げる奴だ」と最初の警備兵がささやいた。

「そして私は彼を叩きのめしてやる」と二番目の歩哨は唸り、武器を放ち、元の隊列に戻る。

ガシャン !大聖堂上部の張り出し部分の巨大な塊が崩れ落ち、破片が爆発した。雪崩は男たちを吹き飛ばした。雪崩が収まった後、彼らは地面に横たわり、あざだらけで、呆然として屋根を見つめていた。

怒鳴り散らすボーン大尉は、大聖堂の扉を突き破って入った。彼は無防備な入り口に松明をかざし、近くの敷地に埃まみれの兵士たちが倒れているのを発見した。

うめき声を上げ、頭頂部をこすり、上を見上げた。男たちは飛び起き、瓦礫だらけの警備所に急いで戻った。ちょうどその時、二人の乱れた身なりの修道士が教会の扉から出て、崩れた石につまずいた。ボーンは扉から離れ、崩れた石の間を歩いた。一番大きな石は簡単に人を押しつぶすことができた。クロディウスとグレヴィルも彼に続いた。隊長は視線を上げ、屋根の張り出しが大きく欠けていることに気づいた。やがて彼は兵士たちの列に戻り、一番背の高い警備兵の腕をつかんで問い詰めた。「この扉をしっかりと守るように命令したのではなかったか？」

「申し訳ありません、隊長」と兵士は答えた。「つい先ほど、教会の人たちに殺されそうになったんです。」

ボーンは彼を揺さぶった。「教会の石なんてどうでもいい !枢機卿を通したのか？」

「確かにその通りです。閣下は、この扉から誰も入ってはならないとおっしゃいました。枢機卿は閣下の命令により、助けを求めるために別の修道士を呼びに来たとおっしゃいました。」

艦長は歯を食いしばり、彼の顔をじっと見つめて唸った。「私はそんな命令は出していない。」

クロディウスは慌てて前に出た。「隊長、部下たちは枢機卿が従者を連れているのに気づきましたか？」

ボーンは手を離した。「修道士に答えろ。」

「はい、たくさん論文があります。」

グレヴィルは涙を拭い、ようやく正気を取り戻した。首の後ろをこすりながら、ブラージ枢機卿の奇妙な行動について考えを巡らせた。「それから彼は修道士を呼びに寮に行ったのか？隊長、我々はいつでも彼を手伝うことができたのに。」

「彼は寮へ向かったのか？」とボーンは尋ねた。

「いいえ、違います。彼は北側の修道院門の方へ歩いて行きました」と兵士は認め、その方向を指差した。「彼は負傷しているようでした。本人が言うには、助けが必要だったようです。」

ボーンは兵士を隊列から押し出し、入り口の壁に叩きつけた。「このクソ野郎！衛兵隊長が修道士たちを寮の中に閉じ込めているんだぞ！修道院の壁の外にある唯一の建物は」
隊長は我に返り、クロディウスの方を向き、目を細めた。松明の光の下で、修道士は彼の顔から血の気が引いていくのを見ていた。ボーンは兵士を放し、ある可能性に気づいて首を振った。「まさか 枢機卿がそんなことをするはずがない。」

彼はドアに向かって歩み寄り、大聖堂の内部に向かって叫んだ。「全員、警備隊長の指揮の下、敷地内に集まれ！」100人のずぶ濡れで汚れた兵士たちが教会から溢れ出すと、ボーンはそのうちの3人を引っ張り出した。
脇に寄って。「お前たちも私に同行しろ。武器を構えろ。」彼はクロディウスの方を向き、指で彼の胸を突いた。「もし私がこの枢機卿を取り戻せなければ」ボーンはそれから修道院の北門に向かって駆け出し、3人の兵士が彼の後を追った。彼は門で少し立ち止まり、そこに立っていた衛兵に質問し、松明を振り、管理人を地面に突き倒してから修道院から飛び出した。やがて彼は歩調を速め、厩舎に近づくと息を整えた。

厩舎の中では、神経質な馬たちが息を荒げ、足を踏み鳴らし、銜を噛み、締め付けられた手綱を引っ張っていた。

「隊長が近づいています」と、馬と建物の警備を担当する数人の兵士のうちの一人が叫んだ。男たちは厩舎の中を慌ただしく動き回り、それぞれの持ち場につき、最年長の兵士は納屋の入り口のそばで気をつけの姿勢をとった。

「枢機卿を逮捕しろ！」ボーンは兵士に近づきながら叫んだ。

「隊長？」兵士は彼に尋ねた。

「彼はここにいないのか？」

「いいえ、違います。」

ボーンは立ち止まり、不思議そうな表情で修道院の方を振り返った。

「彼は既に出発しています、大尉」と兵士は付け加えた。

ボーンはくると振り返った。「まさか、彼をただ立ち去らせたわけじゃないだろうな！」彼は厩舎に駆け込み、懐中電灯を回しながら内部を調べた。

兵士は彼の後を追った。「彼はムラート村へ向かい、ご命令どおり修道士を迎えに行きます。」

「そんな命令は出してないぞ、このバカ！」ボーンは納屋の柱を叩き、空っぽの繋がれた馬の列の間の空間。「私の馬はどこだ？」

兵士は返答をためらった。「閣下 ええと 枢機卿は、閣下が 閣下が閣下の馬に乗るよう命じられたとおっしゃっていました そちらの方がより信頼できる馬だったと。」

ボーンは兵士を後ろに押しやった。「そりゃそう言うだろうな！」彼は他の厩舎番の顔を見回した。「それに、そう推測するのも無理はない。お前たちの隊長の愛馬なんだからな！」彼は信じられない思いで、思わず笑いそうになりながら首を振った。「私の愛馬をそいつに渡したのか？」

「彼は聖座の枢機卿です、隊長」と衛兵は答えた。「我々は枢機卿閣下を補佐するためにここに来たのではありませんか？」

ボーンは深呼吸をした。「まったく、うっかり忘れていた」と彼は頷きながら他の男たちの方を向いた。「準備しろ、四頭の馬 最も速く、最もよく休養した馬だ」彼は四人の男を指名した。「お前たちは追跡するのだ。枢機卿とその書類を捕らえろ。準備はいいか？」

「お前たち自身で乗れ。」男たちは納屋の壁に集まり、用を足しながら、隊長がゴゴゴという音の中でさらに指示を出した。「あとはこの修道院から出る道は一つしかない。小柄な二人は風のように速く、ムラトに着くまで一切速度を落とさずに進みなさい。その後は引き返し、影に隠れながら馬を歩かせ、道端や茂みを静かに搜索して、隠れている負傷した枢機卿を探みなさい。」彼は二人の大柄な兵士の背中を軽く叩いた。「君たちは遅い方の馬に乗り、着実に進みなさい。」

村へ向かえ。先を行く二人の男を追い越すなよ 私が何を期待しているか分かっているだろう。枢機卿と彼の書類全てを返せ しかも、彼の小指一本たりとも傷つけずにだ。」

「了解しました、船長」と彼らは答え、気を取り直して馬の準備を整えた。ボーンはヘルメットを脱ぎ、髪をかき上げ、愛馬が最後に繋がれていた空っぽの場所をちらりと見た。そして、目に怒りを宿らせながら、年長の衛兵の方を振り返った。

「そして、この厩舎にいるすべての馬の中から、枢機卿はたった一頭の馬 私の馬 だけを選んで、ムラトから架空の司祭を連れてくるつもりだったと、あなたに信じ込ませたのですか？」

「申し訳ありません、大尉」と兵士は答え、燃えるような視線から目をそらした。

「もし私たちが知っていたら 」

「ガシャン！」ボーンはくると向きを変え、ヘルメットを兵士の頭に叩きつけ、彼を地面に倒すと、意識を失った男の胸にヘルメットを投げつけた。

「私と枢機卿が一緒になるなんてありえない ！私と聖人が一緒になるなんてありえない！」ボーンは怒鳴った。「私と神が一緒になるなんてありえない！お

前たちの命令は私から、私一人から発せられるのだ！」

騎乗した兵士が馬に鞭を入れ、前進を促した。「隊長、そろそろ出発しましょうか？」

「急げ！」ボーンは叫び、彼らに先へ進むよう合図した。四人の騎馬隊は厩舎から飛び出し、馬の蹄の轟音が夜の闇に消えていった。

静寂の中、一見無表情なボーンは厩舎の柱にもたれかかり、空を見上げた。すると、丸い月が浮かび上がり、その中に映し出された月は、グレイト修道士の皮を剥がれた顔に瓜二つだった。

ボーンは3人の兵士と共に厩舎を出た。修道院の門に入り、兵士たちに大聖堂のそばの既存の隊列に加わるよう命じた途端、兵士と聖職者の群衆が彼に押し寄せた。クロディウス、グレヴィル、背の高い衛兵、そして年配の銀髪の将校。ボーンは背の高い兵士に質問した。「司祭たちは寮は安全ですか？

「そうです、船長。あの太った修道士は私が保護しています 浴場に。」
ボーンはうなずき、彼の腕を軽く叩いた。そして老将校の方を向き、「それで、悪魔少年の捜索はどうなったんだ？」と尋ねた。

「トンネルも地下室も床下もくまなく捜索しましたが、彼の痕跡は一切ありませんでした。しかも、トンネル内で火事が起きています。修道院の井戸のそばにバケツを集めておきました」と男は食堂の方角を指さしながら言った。「火を消しましょうか？」

隊長は答える前に地面を見渡した。「いや、燃やしてしまえ。」彼は将校をまっすぐ見つめた。「地下墓地を封鎖して警備してほしい。もし奴がトンネルに隠れたら、私は「奴を煙にさらって追い出そう。」ボーンは指を鳴らし、修道院の南門を指差した。

「残りの兵士を連れて墓地を制圧せよ。墓石を一つ残らずひっくり返し、木々を一本残らず伐採せよ。」
それでも彼を捕らえられない場合は、数人の歩哨を影に潜ませ、彼の痕跡を密かに監視させよ。」ボーンは深く息を吸い込み、うなずきながら、自己肯定のためだけに声に出して言った。「いずれ彼は隠れる場所を探すのに苦労するだろう。」

クロディウスは兵士のそばに歩み寄り、咳払いをした。将校は答えて、ナラムシンは祭服の下から、もろくなった巻物を取り出した。「これです、隊長」と彼は言い、巻物をボーンに手渡した。「火事の前に、少年のベッドに隠されていたこれらの書類を見つけました。」彼は指をクロディウスとグレヴィルに渡した。「修道士たちは、これらが重要な意味を持つもの、あるいは役に立つものと考えているようです。」

ボーンはクロディウスを鋭く睨みつけた。グレヴィルに懐中電灯を渡し、羊皮紙を広げると、墓地の捜索を開始するよう命じた。「私は浴場にいる。悪魔の少年を捕まえたら連れてこい。」

「はい、大尉。」老兵は慌ただしくお辞儀をして退席した。
ボーンは衛兵に「大聖堂から兵士たちを連れてこい。彼らを宿舎に連れて行き、兵力を倍増させろ」と命じた。

「ああ。」背の高い軍曹は頷き、立ち去った。

グレヴィルの懐中電灯の下で、ボーンはナラムシンの手紙に目を通し、その間、軍曹は百人の兵士を集めて中庭を横切って行進させた。

最後にクロディウスが口を開いた。「もしよろしければ、船長、少しお話をさせていただきたいのですが。」

ボーンはただ頷き、読書続けた。

グレヴィルは首を振りながら、「長年の間、私はそれに気づかなかったが、少なくとも疑うべきだった。

ラザロは本当に生き残ったグロテスク、つまり神の母だったのだ！」と付け加えた。

イワンは彼を覆い隠した顔を地下墓地に隠した。日光に当たれば間違いなく死んでしまうからだ。今となっては、全てが腑に落ちる。微妙な兆候は至る所にあった。おそらく我々は皆、それらを無視することを選んだのだろう。」彼は身を引いた。

そして、大聖堂の屋根に並ぶ彫像の列の方を見上げた。

ボーンはグレヴィルの手をつかみ、ナラムシンの手紙の最後の部分を読み終えるまで、懐中電灯をページの上で軽く支えた。それから彼は慌ててページを巻き戻し、目を細めて

クロディウス。「あなたの修道院に滞在している間、あなたは私にとって唯一にして最大の邪魔者でした。」

ボーンは手に持った羊皮紙の巻物を何度も叩きつけ、自分が嫌悪するようになったあのうんざりするような修道士たちからも一言でも聞くのをためらった。

クロディウスは身を硬くした。「お願いします、船長。あの羊皮紙はとても古くて繊細なのです。」

「もしかしたら、私が保管係を任されるかもしれませんね？」クロディウスは巻物に手を伸ばしたが、ボーンはそれをひたたくり、しかめっ面をした。彼は巻物をベストにしまい込み、穏やかな口調で取引を持ちかけた。「君たち二人は私と一緒に浴場に行き、書類について知っていることを話してくれ。だが、面会の見返りとして、浴場では全面的に協力してほしい。あの太った修道士から、悪魔の少年の居場所について自白を引き出すつもりだ。」

クロディウスはグレヴィルをちらりと見て頷いた。「そして、我々もあなたを支援いたします、隊長。」

「あの太った修道士は」とボーンは言った。「もう一度聞か、彼は自分のことを何と名乗っているんだっけ？」

「デロンだ」とグレヴィルは言った。「デロン・オディーノ。彼もまた上級修道士で、ゲートストーンのことをよく知っている。」

クロディウスは付け加えた。「そして、あなたが探しているグロテスクな悪魔少年は、ラザロのことで、隊長。」

「オディーノ」とボーンは言いながら、指の関節を鳴らし、浴場に向かって歩き出した。

「では、これらの書類について教えてください。」

グレヴィルが道を照らし、クロディウスはボーンに自分が持っているものについて説明した。「それらの文書は、およそ300年前にグロテスクによって書かれたものです。私が最初の部分から得た情報によると、このページでは、このグロテスクが門石の刻印を完全に翻訳しました。」

大尉殿、私を含め数百人の上級修道士が、その刻印を解読しようと無数の製本を試みてきました。私たちがまた上級修道士ですので、私たちの製本も写字室に、未公開の作品群の中に保管されていました。この修道院の歴史において、これまでどの修道士もその刻印を翻訳したことはない、というのが私たちの知る限りです。ところが今、私たち数百人が成し遂げられなかったことを、たった一人のグロテスクが成し遂げたいことが分かりました。しかも、ラザルスはグロテスクです。私が知る限り、彼は複数の言語で読み書きができるのです。そして、あなたの部下たちは彼の所持品の中からその文書を発見しました。以上のことから、私は今、門石に刻まれた刻印はグロテスクだけが解読できる言語であると確信しています。

ボーンは立ち止まり、振り返った。「私が陛下の近衛隊長である理由をご存知ですか？」鋭い反論で、ボーンは自らその質問に答えた。「私は物事をあるがままに、あるいはあるかもしれない姿として見ており、そうでない姿として見ることは決してありません。」クロディウスは一步下がり、隊長の頬の傷を見つめながら続けた。「あなたは、悪魔少年はグロテスクであり、その印を解読できるのはグロテスクだけだと言います。しかし、枢機卿は猫のような耳も犬のような歯も持ち合わせておらず、自らの文書でその石碑を自在に操る能力を証明してみせた。そして、彼の言葉はラテン語だったと記憶しているのだから、あなた方がグロテスクな話で私の時間を無駄にしているか、あるいはあなた方聖職者全員が解読できなかった碑文をこの枢機卿が解読したかのどちらかだろう。さて、どちらなのか？」

グレヴィルは首を横に振った。「枢機卿の書物を見ました。隊長がお持ちの書物と同じくらい古いものでした。なぜあんなに繊細で脆い紙に書き記したのでしょうか？」グレヴィルはクロディウスの方を向いた。「そうは思えません。枢機卿は上級評議会の一員として、外典のアーカイブに自由にアクセスできるはずです。」クロディウスはうなずいた。「もしかすると、彼が所有している翻訳書も、このナラムシンの聖職者によって書かれたものでしょうか？」

ボーンはベストから巻かれたページを取り出し、広げながら尋ねた。「では、これらのページがあれば、枢機卿とそのページがなくても、石を閉じる手段があるということですか？」

クロディウスは「はい、でもいいえ、船長。あのページがあれば、ゲートストーンを閉じる手段は手に入るかもしれませんが、しかし、私の推測が正しければ、通訳としてグロテスクな従者ラザルスを同行させる必要があります」と答えた。ボーンはページをめくってみたが、象形文字のような記号しか見えなかった。彼の気分は暗くなった。「その通りです、船長」とクロディウスは顎を上げてボーンにぶっきらぼうな笑みを向けながら言った。「ページには記号しかなく、翻訳はありません。先に進むには、グロテスクな従者を我々に引き渡さなければなりません。それが実現するかどうかは、まだ分かりませんが」

ボーンは唇を噛み締め、慌ててページを巻き直し、ベストの下に挟み込んだ。前に出て、彼はクロディウスのローブを両手で掴み、修道士を自分の方に引き寄せた。グレヴィルは後ずさり、驚いた視線は、クロディウスとその策略を叱責する隊長の燃えるような緑色の目に釘付けになった。「あなたは私を、ゆっくりと展開する物語の一言一句に耳を傾ける愚かな聴衆のように描きたがっているようだな！」彼は掴む力を強め、石のように固まった修道士をさらに自分の顎髭に引き寄せ、クロディウスは彼の言葉の一つ一つに唾のしずくと熱い息を感じるほどだった。「それとも、あなたは私を、私の忍耐が限界に達してもなお、わざと引き延ばす物語の中の哀れな登場人物として描いているのだろうか！どちらなんだ？」彼は彼を揺さぶった。

「とんでもない！」クロディウスは息を呑み、彼に懇願した。「お許しください、隊長。私はただあなたを助けただけなのです！」

修道士の従順さに満足したボーンは彼を解放した。「そして、そうするだろう。」クロディウスはローブを整え、その間ボーンはグレヴィルと率直に作戦計画を練っていた。

「石に刻まれた文字を手に入れたので、今度はあの太った修道士を尋問し、悪魔の少年を探し出して捕らえ、石を閉じるために必要な言葉を翻訳させよう。」

ボーンはクロディウスの方を向き、指をさしながらこう忠告した。「今この瞬間から、私に必要なことだけを話してくれ。それ以上でもそれ以下でもあってはならない。さもないと、お前が聖職者であることを忘れてしまうからだ。私の言いたいことが分かったか？」

クロディウスはうなずき、二人の修道士は軽く視線を交わした後、急いで浴場に向かって突進するボーンの後を追った。隊長が浴場の正面の角を曲がると、建物の中からオディーノの怒鳴り声が聞こえてきた。

「奴らは何も知らないんだ！少年たちを解放してやれ。ここに来て俺にも同じことをして、お前の片腕を折ってやる！」

「もう十分だ」とボーンは怒鳴った。片腕の兵士はタテウスを解放し、駆け出した。従者の少年が壁を滑り降りるのを見て、彼は気をつけの姿勢をとった。浴場の奥の隅から数人の衛兵が突然現れ、準備完了のポーズをとった。

男たち。隊長は兵士を尋問する前に、タテウスとミゲルを一瞥した。「何

これらの行動は誰の命令によるものですか？

「悪魔の少年の居場所を知るために、自白を引き出しているのです。」

ボーンはグレヴィルからトーチを受け取り、兵士の手押し付けた。突然、オディーノの声が建物の内部の暗闇に響き渡った。「何もない

「引き抜いてやれ！俺の縄を解けば、お前のもう片方の腕も引き抜いてやる。その鳥みたいな脚で若い従者を殴りつけるのが精一杯だろう！」片腕の兵士はオディーノの嘲りの言葉を無視して目を丸くするだけで、命令は軍曹から来たと言隊長に告げた。ボーンは二人の間をじっと見つめた。

殴打された従士の少年たちに答える前に、彼は言った。「彼らの様子からすると、お前は始めた時と何も分かっていないようだ。だが、自白を引き出すという口実で彼らを殺したいのなら、どうぞ続けてくれ。」彼はタテウスの方を指差し、それから衛兵たちの方を指差した。「おそらく、お前たちの目の前にいる全員が、お前たちの厳しいやり方を目撃したいと思っているだろう。」

「あの、彼らは自白するつもりはないようです、大尉」と兵士は認めた。ボーンは彼の顔に近づき、唸るように言った。「では、彼らは彼の居場所を知らないのだろうか？どう思う？」

「はい、隊長」と兵士は答え、さらに姿勢を正して気をつけの姿勢をとった。

「じゃあ、この子たちを寮に戻せ！」

兵士は松明を持って振り返り、タテウスに少し身をかがめてから再び立ち上がった。彼は、少年を立たせる手が空いていないことに気づいた。グレヴィルは嘲笑し、クロディウスは彼を睨みつけた。ボーンは兵士たちに、殴られた少年たちを寮まで運ぶよう命じた。彼は残りの者たちを浴場の入り口の外に配置し、片腕の男に「お前は私の先導役だ。自白を引き出す正しい方法を学ぶことになるだろう」とささやいた。そして、警備員を建物の中へ案内した。

影が消え、懐中電灯の光が照らし出すと、顔を赤く汚したオディーノが、浴場の床の中央にある木の柱に両手首を縛り付けられているのが見えた。ボーンは僧侶に近づき、彼を観察した。オディーノの袈裟の左袖は破れており、右足のサンダルだけを履き、左足は裸足だった。「もし私の部下たちがあなたをひどく扱ったのなら、どうかお許しください。彼らは多忙な任務の最中、時として礼儀作法を怠ってしまうものです。」ボーンはオディーノの肩を軽く叩いた。「あなたを宿舎に戻し、新しい服に着替えさせたらすぐに、あなたを虐待した者たちを厳しく懲らしめます。」

オディーノは唸った。「イワン修道士にしたように、彼らを正してあげたらどうだ？」

ボーンは顎を食いしばり、二人は松明の光の中で視線を交わした。彼は縛られた僧侶の周りを回り、注意深く観察した。オディーノはクロディウスとグレヴィルが影から出てくるのを見つけた。「お前ら泣き虫の僧侶ども、ここで何をしているんだ？まさか、お前らは「地下墓地の管理でもするのか？」クロディウスは貴族特有の傲慢な視線でオディーノを見下ろした。

ボーンはオディーノの顔に近づいた。「私の義務や悩みはあなたには関係ない。私は何も望んでいない。」

「この修道院の司祭たちに、これ以上の災いが降りかかるだろう。」彼はクロディウスとグレヴィルを指差した。

「ほら、お前の聖職者の兄弟たちは修道院内を自由に歩き回れるんだぞ。」グレヴィルは腕を組み、肩をすくめて身振りをした。オディーノは隊長を睨みつけ、彼が

彼の兵士たちは司祭と従者たちを宿舍に閉じ込めた。ボーンは続けて言った。「今すぐお前たちの縛りを解いてやろう。だが、そのためにはお前たちにちょっとした頼みがある。ラザロという名の従者の少年を探している。彼の居場所を教えてください、お前たちを解放してやろう。」ボーンは身を乗り出し、縛られた修道士にささやいた。「陛下の近衛隊長として、約束する。」

オディーノは「あいつの父親に居場所を聞いてみろ！」と囁き、ボーンの髭に唾を吐きかけた。隊長は拳を振り上げたが、すぐに腕を下ろした。頬を拭い、手を振ってクロディウスとグレヴィルを呼び寄せた。二人の修道士が近づいてきて、ボーンのベストに巻かれたページを見つけると、隊長が話している間もクロディウスの貪欲な目はそこに釘付けになっていた。「修道士だけの静かな場所で少し時間をお与えしよう。そうすれば聖職者の理性の優しさが勝るだろう。」ボーンは衛兵から松明を受け取り、グレヴィルに渡しながら、オディーノにも聞こえるように大きな声で「まだ歯が残っているうちに」と付け加えた。そして、3人の修道士を残して浴場を去った。彼ら自身にとって。

クロディウスは、なだめるような笑みを浮かべながらオディーノに語りかけた。「私たちは意見の相違がありましたが、私としては、どうか私を許してください。」

「許すだと？」オディーノは信じられないといった様子で尋ねた。「イワンが死んだのも、私がこの役目に縛られているのも、すべてお前のせいだ！それに、お前が私に与えたあの悲惨な運命はどうなんだ？」

ラザロは今や見捨てられ、滅びる運命にあるというのか？ 聖職者の兄弟として、あなたは何の思いやりも恥じらいも、憐れみも慈悲も持ち合わせていないのか？ 特に哀れなラザロに対しては？

クロディウスはグレヴィルを一瞥してから弁明した。「君の逮捕を命じたのは船長だ。」

「あなたの意図はよく分かっています」とオディーノは叫んだ。「あなたは枢機卿を操ってイヴァンと私を陥れ、監督官としての地位を守ろうとしているのです。」

「地下墓地だって！」クロディウスは驚いて息を切らした。オディーノは肩越しに、イワンが逃走を装うために使った便所をちらりと見た。「クロディウス、お願いだ。キリストのしもべとして、この修道院の兄弟として、私を縛っている縄を解いてくれ。自由になれる機会を与えてくれ。そうすれば、私も君に同じことをしてあげるだろう。」

グレヴィルは入り口の方を指さした。「船長はすぐ外にいらっしゃいます。私はあなたと一緒に縛られたくありません！」

クロディウスは同意し、「すぐに逃げ出す手段はない」と付け加えた。

「クロディウス、方法はある。君が関与したように見せかけずに、私を助けることができる。保証しよう。」

「もう十分だ」とクロディウスは叫んだ。「ラザロの居場所を白状すれば、隊長はお前を釈放するだろう。この修道院のすべての修道士を代表して、この件を終わらせるようお願いする。」

愚かなことだ。

「私が見捨てるだけでも思っているのですか？」

「お前は自分を含め、我々全員を見捨てた！隊長は自分に逆らったイワンを殺した。同じ過ちを繰り返すな。さあ、ラザロはどこに隠れているのか教えてくれ！」

オディーノは明らかに敗北感を露わにし、視線を落とした。彼は床を見つめ、弱々しく微笑んだ。

「もしかしたら、あなたの言うことは本当かもしれません。もしあなたが神の僕として、その少年を傷つけるつもりはないと約束してくれるなら、私はあなたを彼のところへ連れて行きましょう。」

グレヴィルが前に進み出たが、クロディウスは彼の袖を掴んだ。「オディーノ、俺たちを馬鹿にしているのか？ ラザルスを拘束した後、隊長はお前を解放したがっているぞ。」

オディーノは浴場の入り口をじっと見つめ、小声で言った。「ラザロを見捨てるわけにはいかない。隊長はイワンと同じように彼を殺してしまうだろう。だが、彼を修道院から連れ出してくれると約束してくれれば、彼の隠れ場所を教えてやろう。ラザロの運命は君の手に委ねられている！」

二人の修道士は顔を見合わせた。クロディウスは同意した。「よろしい。約束しよう。」ラザロは修道院の敷地から出て行くはずだ。さあ、彼の居場所を教えてくれ。」

オディーノはうなずき、不道德な修道士にささやいた。「クロディウス、あなたは良い人だ。私はあなたには借りがあります。ラザロは隠れていて　」彼は戸口を見て、わざと残りの言葉を咬いた。

「もう一度お伺いします」とクロディウスは言いながらさらに近づいた。「彼はどこにいるのですか？」

オディーノは柱に背中をぴったりと預け、もう一度「ラザロは隠れている　」と囁いた。そして、かかどでクロディウスの胸を叩きつけた。司祭は後ろに倒れ、床を転がり、胸を押さえた。グレヴィルは喘ぎ苦しむ師匠の元へ駆け寄った。

「私はイスカリオテのユダではない！」オディーノは唸った。「私はラザロを守ってきた。誰のためにも、ましてや兵士やその操り人形の司祭のために、彼や彼の父親を見捨てることなど決してない！」

「キャプテン！」グレヴィルは叫んだ。「キャプテン！」

ボーンと部下たちは戸口を突き破って二人の修道士を取り囲んだ。隊長はオディーノを見たが、彼は肩をすくめるだけだった。「聖職者の礼儀作法もここまでか」とボーンはぶつぶつ言った。「また一人、心に火を灯した修道士がいるようだな」。彼はグレヴィルにクロディウスを浴場から連れ出すよう命じ、それから部下二人にオディーノの足を縛るよう命じた。オディーノは足を蹴り、隊長はさらに多くの兵士を呼び寄せた。修道士が無事に縛り上げられた時、ようやく彼は姿を現した。「お前にはもう一度、名誉挽回のチャンスを与えよう。悪魔の少年はどこに隠したのだ？」

「悪魔少年って何だ？」オディーノは尋ねた。「あんな奴は見たことがない　」

ボーンはオディーノの胸に拳を叩きつけた。咳き込む神父に「もう一度聞か、悪魔の少年はどこだ？」と問いかけた。

「私はこれまで生きてきて、悪魔の少年を見たことがない」

オディーノの顎は、別の拳の一撃で砕け散った。血と唾が飛び散った。

ボーンは「またか、悪魔の少年か？」と叫んだ。

「許してやるよ、キャプテン」オディーノは舌足らずな口調で言った。「主があなたに示していただきますように」

オディーノはもう一撃の衝撃で体を折り曲げた。

「悪魔の少年だと？」ボーンは問い詰めた。

オディーノは顔を上げ、無理に笑顔を作り、ぎこちなくウインクした。ボーンの怒りは頂点に達した。

その後、オディーノは、修道院での短い滞在中に兵士時代よりも多くの不可解な恐怖、許しがたい過ち、そして全くの愚行を経験した隊長の容赦ない怒りに晒された。しかし、焼けるような痛みが過ぎ去り、血が本来あるべきでない場所に溜まった後、オディーノはそれほど悩まなくなった。目が腫れて閉じ、次の打撃を予測できなくなった後、彼はもはや予感に苦しめられることはなくなった。耳鳴りが隊長の叫び声を静めた後、平和が訪れた。そして、肋骨が折れる音とともに、イヴァン、ラザルス、ミゲル、タテウスと共にカタコンベで過ごした楽しい過去の記憶が閃いた後、彼は歯がなくても微笑むことができた。結局のところ、人生は彼に良いものだったのだ。

「目を覚ませ！」ボーンは叫び、縛られて跪いている僧侶にバケツ一杯の水を浴びせた。オディーノは息を呑み、踵をついて後ろにのけぞった。

グレヴィルは彼のそばに駆け寄り、腕を掴んだ。「オディーノ、神のご加護があれば、船長に伝えてくれ。」

オディーノはうめき声を上げながら、修道士に体重を預けた。「私は、私は、赦しと終油の秘蹟を求めます。あまり時間がありません。ニコラス修道士を呼んでください。告解は彼にだけお願いします。」

「もう神父はいらない！私に告白しろ！」ボーンはそう叫び、バケツを投げつけて壁に叩きつけた。「お前は私にしか話せない！」

胸を押さえたままのクロディウスはボーンに近づいた。「隊長、よろしければ。要請があれば終油の秘蹟を施す義務があります。従うことは我々の絶対的な義務であり、聖下によって神聖に定められ、聖座の命令によって厳格に執行される規則です。彼が選んだ司祭による最後の告解を拒否することはできません。」クロディウスはささやいた。「どうか、この一つの願いを彼に許してください。告解の中で、ニコラス修道士からラザロのグロテスクがどこに隠れているかを突き止めましょう。我々には彼の先輩として、かなりの知識があります。」

説得の手段。」

ボーンはクロディウスを睨みつけるだけで、警備兵たちが浴場の入り口から道を空け、息を切らした兵士が無理やり彼らの間を通り抜けた。男はボーンに近づき、息を整えてから言った。「恐れ入りますが、大尉。教会へすぐにお越しいただく必要がございます。」

「何のために？」ボーンは顔をしかめて尋ねた。
兵士は周囲の好奇心に満ちた顔を見渡した後、ボーンの耳元に顔を近づけ、静かに言った。「これは非常に重要なことです、大尉。」
ボーンは鼻を鳴らし、振り返ってクロディウスの胸を軽く叩いた。修道士は血の滲んだ拳を見下ろしながら、隊長に話しかけられた。「司祭に終油の秘蹟を受けさせろ。私が戻ったら、悪魔の居場所を知らせておけ。そうしろ。」クロディウスは同意し、ボーンは一番近くにいた衛兵に振り向き、グレヴィルを指差した。「彼を寮まで護衛させろ。終油の秘蹟のために修道士を連れてこい。ニコラス修道士だけだ。」彼は松明を手に取り、兵士の後について建物を出た。クロディウスはすぐにグレヴィルを自分のそばに引き寄せ、ささやいた。「戻ってきたら、ラザロのニコラスから…」

居場所を。彼にはっきり伝えておいてくれ。ガルディアン修道院での残りの日々を、最大限の苦行と徹底的な沈黙、そしてもちろん主への揺るぎない敬意をもって過ごすよう、私が個人的に見守るつもりだ。さて、私は隊長の後を追わなければならない。さあ、急ごう。オディーノが亡くなり、グロテスクの居場所の知識を永遠に持ち去ってしまう前に。」グレヴィルはうなずき、兵士と共に立ち去った。クロディウスは影の中に忍び込み、遠くからボーンの後を追った。

隊長が大聖堂の角を曲がると、兵士は教会の外壁の方を指差した。そこには、松明の輪の下で、ブーツの横に座り、裸足をさすっている男たちが一列に並んでいた。

「ほんの数分前のことです、大尉。」兵士はボーンを教会の脇の入り口まで案内し、出入口を指差した。「ほら、あそこだ。燃える霧が逃げていく。」

ボーンは入り口に近づき、入り口の敷居からじわじわと染み出ている黒い霧を調べた。そして地面を覆い隠すように。彼はしゃがみ込み、渦巻く霧の中に指を通し、水ぶくれのできた指先を急に引き抜いた。
兵士は「確かに、大尉。そして、死の匂いがします」と答えた。

ボーンは霧から後ずさりしながら、自分の指の匂いを嗅いだ。そして大聖堂を見渡した。
「兵士よ、急いで宿舎に行き軍曹に伝えてくれ。
私は、より休息のとれた部下の3分の1を修道院の井戸に集めるよう命じる。井戸のそばには桶が置いてある。男たちは水を汲み、土を集め、桶いっぱい泥を混ぜるのだ。私は全員に

ひび割れや隙間を塞ぎ、必要であれば教会全体を埋め尽くせ。」

「はい、隊長。」兵士はうなずくと、駆け去っていった。

懐中電灯の下で、ボーンは痛む指先を調べ、拷問について考えた。

グレイト修道士は苦しんだに違いない。足音に気を取られ、急いで近づいてくる衛兵に目を向けた。衛兵は立ち止まり、息を整え、彼に話しかけた。「緊急事態です、隊長！」

「今度は何だって？」

兵士は教会の屋根を指さした。「彫像が動くんです！」ボーンはちらりと上を見上げた後、彼を睨みつけた。「よろしければ、月の光に照らせば見えるはずですよ。」

「見せてくれ」とボーンは答えた。警備員がボーンを反対側へ案内すると、大聖堂で、隊長は彼に警告した。「さもないと、お前を動かすことになるぞ。」
「奴らは動く」と兵士は彼に断言した。

ボーンが修道院に到着して以来経験してきた奇妙な出来事の数々を考えると、またしても恐ろしい発見があったとしても、それはますます悪化していく超現実的な出来事のリストに、また一つありきたりな要素が加わったに過ぎなかった。「そう言ってもいいでしょう、私は確信していました。」

クロディウス修道士は食堂の暗い隅を覗き込み、鋭い目でボーンを見つめていた。そして、彼らが大聖堂を一周する間、警備兵もいた。隊長は、教会の上層部を視察するために公然と集まっていた数人の兵士に加わった。男たちは上を指差し、ボーンは月と一直線になるように位置を合わせた。クロディウスは茂みをすり抜け、彼らの注意を惹きつけているものをよりよく見ようとした。

本と十字架とコルク栓のフラスコを抱え、ニコラス修道士は寮から飛び出した。精巧な模様の布切れがスカーフのように首にかけられ、そのフリルの端が風になびいていた。若い修道士が何も知らない松明を持った歩哨の列を突き進むと、グレヴィルと兵士の護衛はニコラスの後を急いで追いかけて、先に通行を許可するように呼びかけた。ニコラスは浴場に着くと兵士たちを押し分け、ずっと彼らに向かって叫んでいた。「彼は司祭だ！神の人だ！どうして隊長を許すんだ…」

ニコラスは中に入ると、凍りついた。兵士の松明のちらつく光の中で、浴場の柱の根元にうずくまっている、ローブをまとい血まみれの男が誰だかわからなかった。彼は、修道士の頭を支え、赤く腫れ上がった両目に濡れた布を押し当てている、ひざまずいた衛兵たちに目をやった。ニコラスは駆け寄った。負傷した修道士のそばに道具を置き、彼をよく見た。「違う」と彼は言い、目に涙を浮かべた。「間違いだ。これは彼ではない」彼は振り返り、じっと見つめた。

床に座り込み、悲しみに暮れながら笑ったり泣いたりしていた。「これは違う」

ニコラスは一番近くにいた衛兵の上に飛び乗り、彼の頭を敷石に打ち付けた。残りの兵士たちが彼に群がり、引きずり出した。

「ニコラス !だめだ !時間がない！」オディーノのゴボゴボという声は、若い修道士の怒りをたちまち鎮め、彼はぐったりと倒れ込み、すすり泣いた。それから彼は道具をまとめ、兵士たちを叱責した。「終油の秘蹟にはプライバシーが必要だ！」兵士たちはグレヴィルを見た。グレヴィルは厳粛にうなずき、浴場の入り口へと退いた。男たちはグレヴィルに倣い、建物から出て行った。

オディーノはニコラスにささやいた。「もっと近くに来て、坊や。君が知っておかなければならないことがあるんだ。」若い修道士は、打ちひしがれた修道士の唇に耳を当てた。オディーノが話すと、ニコラスの目は大きく見開かれた。彼は身を離し、オディーノをじっと見つめて尋ねた。「ラザロは彼らの一人なのか？」

「黙ってろ」オディーノはそう囁き、腫れ上がった目でグレヴィルをちらりと見てから続けた。「お前に頼みたいことがあるんだ」ニコラスは真剣に耳を傾け、時折うなずいた。オディーノは咳き込み、柱に頭をもたせかけた。

「さあ、最後までやり遂げると約束してくれ、ニコラス」

若い修道士は顔から涙を拭った。「それでもお前は死ぬのだ !お前が求めるものは」

「私はもう死んでいる！」オディーノが口を挟んだ。「さあ、私に誓いを立てろ！」

ニコラスは深く息を吸い込み、ため息をついた。「御意のままに、お望み通りに。」

震える指で、司祭は首にかけた装飾の施された布を整えた。彼は布にキスをしてから、傍らにあった聖油の入ったフラスコを取り上げた。それから瓶の栓を抜き、オディーノを見るために少し間を置いた。咳の合間に、修道士はニコラスに慰めの微笑みを浮かべようとしたが、松明の光の中では、愛する若い弟子はぼんやりとした輪郭としてしか見えなかった。それでも、ニコラスは師の仕草の裏にある隠された痛みと決意を知っていた。彼はフラスコを傾け、親指でオディーノの額、唇、心臓の上に軽く十字架の印をつけた。それから聖書を開いた。

オディーノは「主よ、過去にあなたに対して犯した罪をお許してください」と祈った。彼が告白を続ける間、ニコラスは彼に寄り添い、臨終の儀式のラテン語の一節を呟いていた。

やがてニコラスは目を開け、オディーノに語りかけた。「キリストの名において、汝は赦される、守護者デロン・オディーノよ。」

オディーノは咳き込み、ぜいぜいとした声で言った。「さあ、始めよう、ニコラス。」

若い修道士は後ろをちらりと見て、懐中電灯を手に戸口に深く身を乗り出している好奇心旺盛なグレヴィルを見つけた。ニコラスはこっそりとフラスコから油を注ぎ出した。金属製の十字架を持ち上げ、唇を噛み締め、頬を伝う涙で息が詰まるのを必死にこらえた。それからオディーノの後ろにほぼ身を隠し、差し出された手をしっかりと掴んだ。ニコラスは十字架の鋭い縁を修道士の指の肉に押し当て、力強く引っ張ると、深い切り傷ができた。突然、オディーノの指から血が流れ出し、ニコラスはその温かい血をフラスコに注ぎ込んだ。

グレヴィルは駆け寄って彼らに光を当てた。「ニコラス、彼を縛った縄を解いてはいけない！」
「私は彼を縛った縄を解かない。」

グレヴィルはフラスコに気づいた。「瀉血は臨終の儀式の一部ではない。お前は彼を殺せ！」
「自分のことに集中しろ、グレヴィル！これは彼の最後の願いの一部だ。」
「それなら、彼が死だけを望むなら、もう終わりだ。」グレヴィルは肩をすくめ、今日目撃したすべてのことに麻痺したように、浴場の入り口へと後ずさりした。
フラスコがほぼ満杯になると、ニコラスは急いで栓をし、首から装飾の施された布を外し、オディーノの指をしっかりと握りしめた。そしてオディーノを抱き寄せ、「終わりました、修道士様」とささやいた。

「確かに、そうしましょう」と、目が腫れたオディーノは答えた。彼は変わらず微笑みを浮かべ、まるで美しい景色を眺めるかのように首を回した。

「オディーノ？」ニコラスは僧侶の肩に手を置き、優しく揺さぶった。
オディーノはうなずき、恍惚とした様子で答えた。「彼は檻の中の鳥だ、イワン。彼には別の世界が待っている。」

「オディーノ？」ニコラスは再び彼を揺さぶった。
修道士は続けて言った。「ああ、確かに！ラザロは何を考えていいのかわからないだろう。彼に馬に乗ることを教えよう。」彼は笑い声をあげた。ニコラスは後ろにもたれかかって泣いた。オディーノの顔に困惑した表情が浮かんだ。「馬はどうする？兵士たちを厩舎を警備せよ。」

泣きじゃくる若い修道士はオディーノの頬にキスをした。「安らかに眠ってください、友よ。」
「彼は馬を見たことがないんだ」とオディーノは微笑みながら言った。「彼は風のように飛ぶだろう！」

ニコラスは温かい水筒を握りしめ、立ち上がった。縛られたオディーノの傍らに、綴じられた聖書を残して。若い弟子は立ち上がり、泣き崩れた。今や、死にゆく師と同じように、周囲の状況も分からなくなっていた。オディーノの心が自分ではなくラザロのことでいっぱいになっているから泣いたのではない。オディーノがもはや自分の存在に気づいていないという事実、動揺したわけでもない。彼が泣いたのは、自分の最も純粋な部分が、オディーノと共に死んでいくからだった。

修道院の敷地に、戦いの角笛のけたたましい音が響き渡った。ニコラスは顔を拭い、振り返ると、グレヴィルが戸口から出てくるのが見えた。衛兵たちは持ち場を離れ、召集令状に向かって駆け出した。騎馬兵がグレヴィルを危うく踏みつけそうになり、グレヴィルはよろめきながら建物の中に戻った。

ニコラスはオディーノに深く頭を下げ、「友よ、汝の意志のままに」と言った。彼は振り返って戸口へ急いで向かおうとしたが、グレヴィルが彼の行く手を阻んだ。「修道士よ、その水筒を持ってどこへ行くのですか？浴場から出ることは許しません。どうか少しお待ちください」

「バキッ！」彼は何も言わずにグレヴィルの顎に拳を叩き込み、グレヴィルと彼の松明を壁に吹き飛ばした。若い修道士は建物から飛び出しながら怒鳴り、「オディーノも終わった！イワンも終わった！そして今、私も終わった！」ニコラスは、自分にとって大切なものすべてを抱えて寮へと駆け出した。温かい水筒、敬虔な師との最後の思い出、そして修道士のローブのひだの下に隠された、大切にしていた重厚で丁寧に縫い上げられたブーツ。それはきっと、オディーノの最後の願いを叶えるために交わした厳粛な約束を確固たるものにするのに役立つだろう。

墓地の搜索を放棄した兵士たちの走る人影が修道院の南門から押し寄せ、中庭は騒然となった。松明を持った衛兵の行列が寮から大聖堂へと流れ出し、敷地内には炎の線が引かれていた。男たちの叫び声、鎧のガタガタという音、そして容赦なく鳴り響く角笛の音に合わせて馬の蹄が轟き渡る。今や修道院は、巨大な軍事的連携の陣形に支配されていた。

グレヴィルは目を覚まし、身じろぎをして、くすぶっている袖を叩いた。彼の隣の隅には浴場から炎が渦巻き、イワンが逃走に使ったローブの山を包み込んだ。彼はむせびながら建物からよろめき出て、クロディウスが彼を掴んだ。

「火事が猛威を振るっている！」グレヴィルは顎をさすりながら息を切らして言った。「ニコラスが逃げ出した。」クロディウスは彼の腕を引っ張った。「構わない！私について来い！」二人の修道士は浴場の入り口のオレンジ色の光から離れ、暗闇の中へ忍び込み、食堂の影になった側をこっそりと回り込んでから、ジュニパーの茂みの陰に身を隠した。茂みをかき分け、兵士たちが整列して大聖堂の周囲全体を取り囲む途切れることのない隊列を組む様子を見守った。厳粛な号令の叫び声が重なり合う中、馬が弾薬を積んだ荷車を北側の修道院門から運び込んでいく。

「なぜ彼らは集まるのか？」
クロディウスはグレヴィルの質問を無視し、彼の肩を軽く叩いて、修道院の壁の基部を指さした。「隊長が巻物の上に石を置いたんだ ちょうどそこ、
兵士たち。見えるだろうか？」
グレヴィルは目を凝らした。「だが、隠れる場所がない。捕まってしまう！」
「焦りすぎなければ、そうはならないだろう。」

グレヴィルはくると振り返った。「僕が？」と彼は信じられないといった様子で尋ねた。

「壁の根元に身を隠せば、暗闇が身を隠すのに役立つ。兵士たちは大聖堂しか見ていない。」

グレヴィルは息を呑んだ。「それを手に入れようとしているのは、あなただ！」

クロディウスはグレヴィルのローブを掴み取った。「時間がないぞ !ほら、あそこだ！」彼は大聖堂の屋根を指さした。グレヴィルが見上げると、眠そうな蛇の巣のように、百体もの石像がうごめいていた。石像たちは段々になった縁のあらゆる端に集まっていた。

「なんてことだ !奴らが動く！」グレヴィルはそう叫び、頭上に十字を切った。
「そうだ！」クロディウスは彼を揺さぶった。「ここから逃げなければならぬ。あの書物も一緒に。今がチャンスだ。急いで！」

グレヴィルは、おせっかいな修道士から身を離れた。「イヴァンが隊長の手によってどんな目に遭ったか、もう忘れてしまったのか？ たかが書類の束のために殺されるわけにはいかない！」

「よろしい」クロディウスは顎を上げ、唾を吐きかけた。彼はくると向きを変え、裏側を下り始めた。食堂で、ぶつぶつ言いながら。「私が彼らの買い手を見つけたとしても、何らかの補償や同情を期待しないでください！」

グレヴィルは彼に呼びかけた。「隊長が剣でお前を斬りつけた時、慈悲や臨終の秘蹟など期待するな！」クロディウスは不機嫌そうに手を振って彼を追い払い、闇の中に姿を消した。グレヴィルは振り返り、茂みをかき分けて、大聖堂の遠い隅の方から松明を持った鎧馬が駆け寄ってくるのを見た。ボーン隊長は馬の速度を落とし、ゆっくりと通り過ぎる荷車から弾薬を集めている忙しい兵士たちの頭上に松明を掲げた。

「槍兵と長槍兵よ、よく聞け」とボーンは教会を取り囲む兵士たちの列に向かって叫んだ。「身を低く構えろ 剣先よりもずっと低い位置に。武器を地面に支え、剣は利き手でない方の手に構えろ。長刀を持っている者は鞘から抜き、前足の横に突き刺せ。合図したら剣を振り回し、大声で叫び、武器の上に屋根の悪魔をおびき寄せろ。衛兵隊長、私の命令を遂行せよ！」周囲に並んだ騎馬将校たちはヘルメット越しにボーンの命令を繰り返した。槍兵と長槍兵が突進した。

剣を振りかざして進み出て、第一防衛線を形成した。

「クロスボウ兵よ、よく聞け !私の合図で、自由に武器を発射せよ。」
膝をついたまま、矢を鞘に収めるな。矢は傍らの地面に集めろ。お前たちは全ての矢を使い切り、目の前の兵士たちを守れ。近衛兵の軍曹たちよ、我が命令を遂行せよ！」装甲騎兵が隊列に指示を出すと、弩兵の波が押し寄せ、槍兵たちを武器で覆い尽くした。

ボーンは教会の屋根を見渡してから、馬を駆って増え続ける群衆のそばに歩み寄った。「弓兵よ、よく聞け !均等に間隔を空けろ。弩兵の後ろに高く立ち、前列を援護しろ。口で矢を急いで放つ者は、2本以上噛むな。供給者を呼ぶ前に、悪魔どもに全ての矢を撃ち尽くせ！」弓兵の壁が押し寄せ、ボーンは馬の向きを変え、叫んだ。「供給者よ、よく聞け !荷車から迅速かつ着実に降りろ。身を低くして兵士の足元に物資を置き、ブーツより高く叩かないで合図しろ。近衛軍曹よ、私の命令を遂行せよ！」

そして隊長が歩兵隊に指示を伝えている間、グレヴィルはクロディウスのぼんやりとした人影が駆け出し、その場で立ち止まり、修道院の壁の麓に沿って恐る恐る動いているのを目にした。彼はボーンの注意の移り変わりに合わせて前進していたのだ。

ボーンは手を高く掲げ、部下たちに構えを命じた。「クロスボウ兵、悪魔どもに最初の弾を撃ち込め !奴らの真ん中に均等に狙いを定めろ。槍兵、長槍兵、合図だ！」ボーンは教会の上の棚を見渡してから腕を振った。「放て！」矢の雨が大聖堂を覆い、石造りのグロテスク像の上で火花が飛び散る中、クロディウスは突進し、石をひっくり返し、巻物をつかみ、食堂へと急いだ。クロスボウ兵が慌てて弾を装填する中、長槍兵は剣と槍をぶつけ合い、嘲笑した。

石像たちは屋根の端に忍び寄り、自分たちを召喚した軍勢を見下ろしていた。石像の獣はどれも姿形が異なり、満月の下でそのグロテスクな特徴がはっきりと浮かび上がっていた。鳥の頭を持つものもあれば、犬や蛇の頭を持つものもあった。体はライオン、人間、豚など様々な獣の特徴を併せ持ち、爪、牙、蹄、尾を備えていた。それぞれが複数の生き物の醜悪な合成物のように見えたが、その個性的な姿の中に共通点があった。それは、背中に大きく広がる膜状の翼が一對のように生えていたことである。

「解け！」再びボルトが発射され、火花が降り注ぎ、石像のグロテスク像を包み込んだ。像たちは羽ばたき、歯を食いしばり、爪を振り回して激しく暴れ回った。叫び声と咆哮が修道院の敷地に響き渡り、像たちは互いに向き合い、段々になった岩棚の上で場所を奪い合った。そして、像たちは降り注ぎ、大聖堂の屋根を越え、月明かりに照らされた野原に群がる花崗岩のカラスのように、兵士たちの頭上に降り注いだ。

「槍だ！矢だ！兵士たちだ！」ポーンは叫んだ。しかし隊列は崩れ、武器は落とされ、兵士たちは散り散りになった。地獄の陽動が始まったのだ。

クロディウスは巻いたページを持って食堂の脇を駆け回り、グレヴィルの横を通り過ぎながら「逃げ！振り返るな！」と叫んだ。二人の修道士は中庭を駆け抜け、恐ろしい襲撃の叫び声と悲鳴から逃げた。クロディウスは浴場の裏の茂みに飛び込み、グレヴィルをつかんだ。「南門は無防備だ！修道院の外壁を回り、厩舎に向かい、馬を確保するぞ！」クロディウスは茂みから抜け出し、浴場の影になった側面を駆け上がった。

グレヴィルは彼の後を追って駆け寄ったが、ローブの山につまずき、月明かりの中へ転がり落ちた。その時になって初めて、グレヴィルはイワンの遺体を発見した。イワンの目は虚ろだった。グレヴィルは慌てて立ち上がり、クロディウスを呼び止めた。クロディウスは立ち止まって振り返り、グレヴィルは彼の白目は恐怖に歪んでおり、顔には恐怖の表情が浮かんでいた。グレヴィルは凍りついた。

「振り返るな」クロディウスは吐き捨て、修道院の門の方へ後ずさりした。「私は厩舎。」

グレヴィルは肩越しに振り返ると、巨大な石のグロテスク像がこっそりと自分を狙っているのが見えた。それはグリフィンに似ていて、ライオンの翼のある体と巨大な頭と爪を持っていた。猛禽類。

グレヴィルは浴場の壁にもたれかかり、すすり泣いた。「助けてくれ、クロディウス！」彼が震える足取りで浴場の正面へ進むにつれ、花崗岩の獣もまた近づいてきた。「頼むから、あいつを追い払ってくれ！」しかし、クロディウスは逃げ出した。グレヴィルは叫び声を上げ、建物の角を回り込み、外から立ち上る煙の中に身を隠した。

浴場の入り口。薄暗い内部を、光り輝くローブの山が照らしていた。

グレヴィルは中央の柱の陰に身を隠し、血まみれでニヤニヤ笑うオディーノの広い背中の影にしゃがみ込んだ。オディーノは床のひび割れをじっと見つめていた。オディーノは、今や戸口を通り抜け、暗闇を探り、敷石を引っ掻きながら進んでくる忌まわしい怪物から、すすり泣くローブ姿のグレヴィルを救うには、あまりにも死んでいた。

クロディウスは安全な場所を求めて走り出したが、すでに持ち場を放棄していた兵士たちと衝突した。修道士の大切なページが地面に散らばっていたので、彼はそれを拾い集めた。

四つん這いになって、恐怖で口を大きく開け、中庭に響き渡る恐ろしい叫び声を上げながら南門に向かって駆け出した。その時、空飛ぶ彫像が急降下してきて、彼を地面から引きずり上げた。そのグロテスクさは、大聖堂の屋根から飛び出したどんな怪物にも匹敵しないほどで、蛇の体、山羊の頭、そして無数の蜘蛛が這い回るような脚を持っていた。その忌まわしい怪物はクロディウスを修道院の壁を越えて空高く運び上げた。その高さは、彼の喉に残る恐怖の叫び声が田園地帯全体に響き渡るほどだった。怪物は善良な修道士を人跡未踏の森の奥深くへと連れ去り、涙の跡だけが残る最も暗い場所へと導いた。

そして、黒い空から降り注ぐ、もろいページ。

まだ修道院の中にいたボーン大尉と11人の騎馬兵が轟音を立てて飛び出した。北門から、開けた場所を駆け抜け、修道院街道をムラット村に向かって突進する。「一緒にいろ！」ボーンは叫んだ。「剣を高く掲げ、頭を低く！木の下に隠れろ！」しかし、森の開けた場所を見つけるたびに、悲鳴がまた一人、馬から引きずり降ろされた男の死を告げた。一撃ごとに、また一頭の馬が石の引き裂く爪の下に押しつぶされた。実際、その夜は邪悪な天使のものであり、地底深くで笑いながら行ったり来たりしていた。

こうして、ほとんど忘れ去られていたナラムシンの翻訳集からほんの数語を暗唱しただけで、ジャン＝フランソワ・ブラージュ枢機卿は、聖座で最も要塞化された2つの修道院のうちの1つであるガルディアン修道院を単独で破壊し、国王陛下の近衛隊の中でも最も有能な部隊であるボーン大尉率いる精鋭部隊を壊滅させた。カゲロウが交尾して死ぬほどの一瞬の間に、たった一度の冒瀆的な行為によって、一人の男の復讐の使命は、400人の兵士、司祭、従者の命を奪い、3つの門石のうち2つ目を開き、大いなる深淵の頂点に立つ大印章をさらに弱体化させたのである。

崩れかけた修道院のはるか下、燃え盛る地下墓地のはるか下、地獄の底から、ルシファエルの天使のような笑い声がこだました。忌まわしい出来事には、彼女の全神経を集中させる必要があったのだ。

～*～

半晩の間、ラザロは大きな月と無数の星空の下、正確に西へと旅を続けた。彼はオーヴェルニュ地方の岩だらけの未開の丘を登り、広大で影に覆われた景色の中を進んでいった。そのすべてが彼の五感にとって未知のものだった。旅の途中、恐怖の発作が静まり、内省のための静かなひとときが訪れると、彼はこうした悩ましい感情の根本原因と考えられている。

ラザラスにとって、知っていたのは修道院の地下墓地、つまり彼が後にした地下世界の境界だけだった。トンネルの壁はしっかりと立ち、その堅固で確かな道筋は永遠に変わることがなかった。地下墓地の揺るぎない予測可能性は、彼を悩ませるあらゆる一時的な苦悩を和らげてくれた。そして今、その場所とそこで共に暮らした人々を集めることは、同じような目的を果たしていた。ただ今、彼はもう二度と彼らに会えないかもしれないことを知っていた。彼の心は花崗岩のように重く沈んでいた。

ラザロは、夢の仕組みや、絶えず変化する夢の風景を長年熟知していた。例えば、夢が際限のない悪夢へと発展したとしても、彼はいつでも自らを覚醒させ、より心地よく予測可能な夢の姿へと変えることができた。そしてラザロは、しばしば、夢の彼方にある世界を夢見ていた。

彼は地下墓地を歩き回りながら、この並外れた場所について知ったあらゆる詳細を一つ一つ繋ぎ合わせていた。しかし、そこが今のように予測不可能で逃れられない悪夢のような場所になるとは、彼は想像もしていなかった。道しるべとなる小道も、曲がりくねった敷石もなく、でこぼこで予測不可能な風景は、果てしなくあらゆる方向に広がっているように見えた。おそらく、彼の不安な気持ちの根本原因は、この瞬間から抜け出して、地下墓地の松明を再び灯すようにと呼びかける父親の聞き慣れた声に気づいても、どうしても意識が戻らないという、不穏な考えの中に埋もれていたのだろう。

寒さと疲労に苛まれたラザロは、いくつもある険しい尾根の最後の1つを登り切った。彼はその頂上に立った。頂上には汚れたロープが、爽やかな東風に旗のようにひらひらと揺れていた。暗い覗き穴から、彼は深い谷、乾いた岩だらけの川床を見渡した。石だらけの谷の向こうには、小さな山の斜面に切り立った崖がそびえ立ち、岩山の麓には、ラザロは、驚きに満ちた顔と咆哮する口が驚くほどよく似ていることに気づいた。山の口だ。イワンに匹敵するほどの厳しい決意を胸に、彼は肩をすくめ、絞首台に送られる誇り高き男のように尾根を下りていった。彼は岩の影に覆われた谷を通り抜け、崖に向かって歩き、ついにその大きく開いた口に飲み込まれてしまった。

【第8章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~